

希望を耕す

還暦越え

東京大学教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

一九五〇年と二〇一七年

個人的な話で恐縮だが、一九五七年生まれの私は、先日還暦を迎えた。有り難いことに、この三〇年ほど運営してきた研究室の卒業生たちが祝いの会を開いてくれた。公式には長寿の祝いということらしい。

確かに一九五〇年代あたりの小津映画などを観ていると、家族の状況から見てもまだ五〇歳代と思しき人物が、自然と最年長の部類として描かれていて、それを超える老人が出てくることは稀である。つまり、還暦にもなると社会の最年長グループに入っているという体なのだ。だから、昭和のこういう映像に触れると、還暦の祝いが長寿の祝いだと言われても違和感はない。試しに統計に当たってみると、例えば一九五〇年の日本で還暦越えの人の数は、総人口の八%にも満たない。還暦越えは押しも押されぬ社会の年長組であった。長寿の祝いもまことに似つかわしい。

ところが、二〇一七年に還暦越えとなった私の場合はどうか。日本には今、還暦越えの人が四千万人もいて、総人口の三分の一を超えている。還暦を迎えたばかりの私など上から四千万番目、社会の年長組どころではない。ちなみに一九五〇年の日本で年長から三分の一

というと、三〇歳強で入ってしまったものだ。超高齢社会の到来ということはわかっていたし、人口ピラミッドも見たことはあるが、還暦を迎え、現代日本におけるその位置付けを考え、時に初めて、今日日本が経験している急激な社会変化を身に染みて実感できた。

同級生たちの様子

この三分の一以上もいる還暦越えの日本人の多くが、いきいきと活動できる場をどのように創り出せるか。これからの日本社会にとって極めて重要な課題である。様々な世代が創意を働かせねばならない。そこで、日本の三分の一以上の方は経験済みのことだが、未経験である三分の二弱の方のために、少なくとも還暦越えしたばかりの人たちがどういう状況にあるか、私の身近なところで見ようと思う。

まず、致命的ではないものの大病の経験をしていたり、何らかの健康上の問題を抱えている人が少なくない。だから、若い人のように素早く活動したり、長い時間集中したりする能力は相当程度衰えているのが普通である。

配偶者と子供がいる場合でも、子供たちは経済的に独立しているケースが多いし、もう同居はしていないというケースも多い。ただその一方で、還暦過ぎの本人よりも更に三〇歳ほど歳

の離れた親御さんの介護に苦勞している人も少なくない。決して余生を楽に過ごすというような立場にいる訳ではないのだ。

以前は熱心に仕事の話をしていた人が、ペットや孫の話に夢中になったり、マラソンを始めたとか、登山を始めたとか、楽器を始めたとか言って、一切仕事の話をしなくなる。名刺をもらうと、卒業以来勤めていたはずの企業のそれではなく、いつの間にか異なる職場の名刺になっていた。そういえば、同窓会の集まりでも決まってスーツにネクタイだった人が、昼間のバスでよく見かけるリラックス・モードの親父になっている。今更仕事のことを夢中になって話されても、ちよつと浮いてしまうのだが、たまに仕事関係の話になると、妙に業界とか経済界全体についての聞いたような話が多くなっていることに気付かされる。年相応に大所高所と言えなくもないが、これまで属していた業界が自分事ではなくなっているものとも受け取れる。

還暦越えに合う働き方は若い世代にも魅力的か？

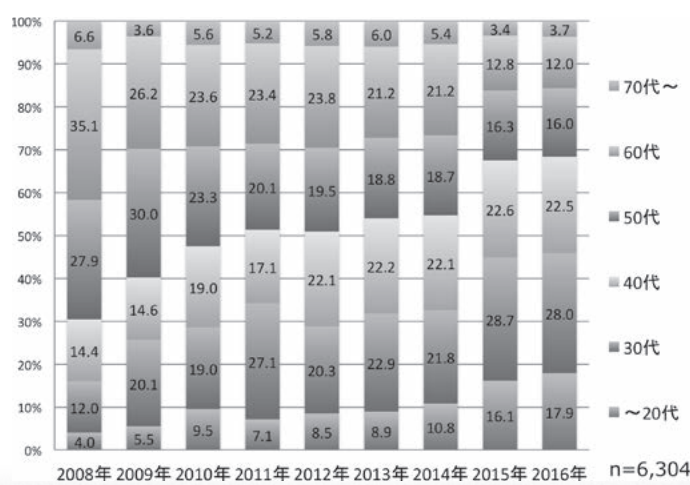
建設業界的に言えば、全産業の中でも就業者が高齢化していて、いかにして若い人に入って

きてもらうかが焦眉の急のようだが、超高齢社会、人口減少社会の中で、そんな夢のようなことばかり言っても始まらない。先ずは、人口の三分の一を占める還暦越えの人々にとって、ペットや孫やマラソンや登山や楽器と同じ位に楽しめる予感のする活動の場を、建設活動全般の中に創り出すことが目指されるべきだと思う。

私の時代感覚では、多くの若い世代の方々も、従前のような仕事一辺倒でないわくわく感のある暮らしを求めている、もし還暦越えの人々を惹き付けるような場ができれば、若い世代にとっても魅力的な場になるに違いないと思う。

ある世代やある特性を持った人々をターゲットにデザインしたり考えたりしたもののが、他の世代や一般の人々にとっても望ましいものになり得るということは、身体能力の衰えた高齢者や障碍者に対象を限定した「バリアフリー・デザイン」が、できるだけ多くの人が利用可能であるような「ユニバーサル・デザイン」という概念に拡張されていった経緯が示唆するところだが、他にも興味深い例が最近の日本にある。

定年退職後大都市圏から地方へのＵターンを希望する人々を支援する目的で、二〇〇二年に設立されたNPO法人ふるさと回帰支援センターの例である。下図の通り、設立から十五年程



ふるさと回帰支援センターの利用者の年代の推移
(資料：ふるさと回帰支援センター)